

【国内の宗教動向】

現代日本における宗教性の行方

——社会問題化する宗教、靖国神社問題、宗教の「社会貢献」の一年から

塚田穂高

一 はじめに

本稿は、二〇〇七年一月～二〇〇八年九月（以下、「今期」とし、西暦を示さない場合はこの期間を指す）の間に国内で起こった、あるいは見られた宗教関係の事件や動向、トピックを中心に構成されたものである。

まず、次節においては、やや長くならざるを得ないが、今期に社会問題化し、報じられた「宗教」関係事件をレビューする。第三節においては、今期の靖国神社問題に関連する動きと、映画「靖国 YASUKUNI」騒動について、経緯を記した上で論じたい。第四節においては、特にチベット問題などをめぐって活発化した仏教界を中心とし

た宗教界の社会への関わりについてまず触れ、宗教研究の領域において研究対象として盛り上がりを見せる「宗教の社会貢献活動」についての動向を紹介したい。もとより、一年ごとに宗教界の動向が変わるとは必ずしも言えず、そこから一つの傾向を読み取ることは、正直言って難しい作業である。個別のテーマや出来事については、「渡邊編二〇〇八、二〇〇九」や「ラーク便り」(季刊)などを参照していただきたい。

二 続発する宗教事件と報道、裁判

事件は常に起こっている。宗教事件も同様である。仮に年表のようなものを作ってみれば、毎年何かしらの事件が起こっていることがわかる。事件が起これば、メディアは大々的に報じる。そして、目だった出来事が続かなければ、一部の裁判続報と追跡取材記事などを除き、忘れ去られていく。だが、それでよし、とはならない。

集団暴行による死亡——一人。死刑確定——三人。詐欺罪で懲役二年の「教祖」。集団暴行による傷害・傷害致死容疑の逮捕——三〇人以上。逮捕監禁・強要容疑等で逮捕——二人。信徒・職員による教団資金の着服・横領——三件・約三億七〇〇万円弱。損害賠償請求——数十人・

総額数億円。セクハラ認定など——。

このように並び立てることは、無駄な作業だろうか。そして、これらを「宗教界」の問題とすることは迷惑な話であろうか。しかし、世間が見る目は、「宗教」が起こした事件、である。報道が、そうである。まずは、何が起きているのか、見ることから始めたい。

●紀元会（大和神社）事件

二〇〇七年九月二十五日未明、一人の年配女性が亡くなった。長野県小諸市の寿司店経営・奥野元子さん（当時六三歳）。外傷性ショックによるものだった。当初は、家族内の喧嘩が昇じた暴行の結果、死亡したと見られ、被害者の夫、長女、次女夫妻が逮捕されていた。寿司店内にも人が争ったような形跡があった。比較的小さな県内ニュース扱いだった。しかしその後、事件は思いもよらない方向に向かう。取り調べで、四人が口裏合わせをして偽装しており、実際には同市の宗教法人紀元会本部の大和紀元会館内で行われていた「反省会」という会合中に、信徒会員らから集団暴行を受けていたことが判明したのである。

一〇月一五日、その日は、朝から何やら慌しい雰囲気があった。早朝六時過ぎに始まった長野県警の紀元会への家宅捜索の様子は、インターネットのニュースやワイドショ

ーにおいて盛んに報じられていた。筆者の勤務する宗教情報リサーチセンターにも、在京キー局のワイドショー、ニュース番組並びに週刊誌等から数件の問い合わせ・米館があった。だが、その時点における紀元会に関する情報は、『宗教年鑑』記載の所在地と責任役員名を除いて、ほぼ何もなかった。インターネット上でも同様であった。宗教研究者やジャーナリストの中でも、同団体の実態について知っている者はほとんどいなかったと言えよう。ここ二〇年ほどの宗教関係事件を振り返ってみると、たいてい何らかのトラブルがあり、それが報じられて社会問題化するパターンが見られる。オウム真理教のトラブルや統一教会による霊感商法、法の華三法行の詐欺事件、ライフスペースの遺体放置事件などは（もちろん事件は食い止められず、起こって始めて大きく取り上げられるのだが）、周辺にトラブルや被害・苦情の集積があった。その点、この事件は、まさに寝耳に水の事件だった。実際のところ、すでに市内の山林に供物を投棄するなど、地域・自治体レベルでは問題が起こっていたのだが、それも報じられたのは事件後である。

紀元会とは、「大神様」と呼ばれる松井健介が、長野県小諸市で設立した神道系新宗教である。崇拝対象は「日之本大神」。同本部内の「大和神社」の崇敬者団体が「紀元会」にあたる。一九七〇年一〇月、長野県から宗教法人認証を